

点が2つあります。1つは「修飾」です。修飾という語は中学校でも出てくるのですが、句と節の区別や形容詞（句・節）と副詞（句・節）の区別については詳しく触れる機会がありません。長文には後置修飾が多用されるので、「修飾・被修飾の関係」を意識させることが必要と思われます。もう1つは「態」です。後置修飾や分詞構文、目的格補語などにおける現在分詞／過去分詞の選択や、受動態の進行形（be being builtなど）においては、態の概念が求められます。前述したとおり、「態」という言葉は教科書では扱われていないだけに、どうしても態の概念が希薄なのです。

一方、発音記号ですが、教科書では1年については巻末の単語リストに、2・3年についてはページ下に新出単語と併記されています。発音記号そのものを教えることはありませんが、囲み記事の Sound Box ではポイントとなる発音記号（[θ][ə]など）が掲載されています。日本語にない子音や発音の似ている母音を教える際には、記号とともに指導することが多いと言えます。